No.368
(2001.7.8月号)

客船よもやまばなし

〈連載145〉

日本のクルーズ客船の需要予測

大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授
池田良穂

日本のクルーズ需要の伸びが、欧米やシンガポール等に比べると小さい原因はどこにあるのだろうか。昨年、11月に大阪府立大学で開催された「第12回クルーズ客船&フェリー研究会」では、スター・クルーズの戦略担当副社長コン・オン氏が、日本のクルーズ市場の分析結果を発表していた。

その分析の多くは、欧米やシンガポール等のクルーズ先進国の人口とクルーズ人口との比を日本の市場に当てはめたり、クルーズ先進国のクルーズ人口の伸び率に適当な仮定をおいて日本の場合に当てはめるといった手法をとっている。こうして推定した結果は、かなり大きな値を示している。例えば、コン・オン氏の講演での前者の例では、アメリカおよびイギリスにおけるクルーズ人口と全人口の比の平均値が1.75%、シンガポール、香港、台湾の場合の平均値が3.77%なのに対し、日本は0.25%に過ぎず、その経済力に比べていかにも小さいと指摘し、欧米並みの比として126〜277万人、アジア並みの比率とすれば470万人のクルーズ人口となってもおかしくはないと述べている。まさに、この結果は日本のクルーズ市場の将来性がバラ色であるかのような幻想を抱かせる。そして、スター・クルーズのようなマスマーケット戦略をとれば、日本のクルーズマーケットも大きく飛躍することが可能であるとしている。はたして、このような単純な予測を信じてよいものであろうか。

もう少し厳密な手法で需要予測はできないものであろうか。そんな期待に応えるべく筆者の研究室の学生であった田角嬢が日本のクルーズの需要予測に取り組んだ。その成果は、この5月に開催された関西造船協会の春季講演会で発表されたので、その概要をご紹介しよう。

まず、日本の観光客には本当にクルーズを選択するという嗜好があるのだろうか。そんな原点に戻って分析をすることとした。まず、旅行を選択する場合の因子として、「人との交流」、「心の安らぎ」、「体の休養」、「自然との触れ合い」、「開放感」、「知識や教養」、「好奇心」、「贅沢さ」、「スリル感」の9つを考え、それぞれの因子を

どのくらい重要視して旅行を選択するかを、AHP法を用いて分析してみた。その結果が図１である。20代の男性では、「開放感」、「心の安らぎ」、「好奇心」が大きなウェイトを占めているのに対し、40代の男性になると、「心の安らぎ」、「体の休息」、「自然との触れ合い」などのウェイトが非常に大きくなっている。

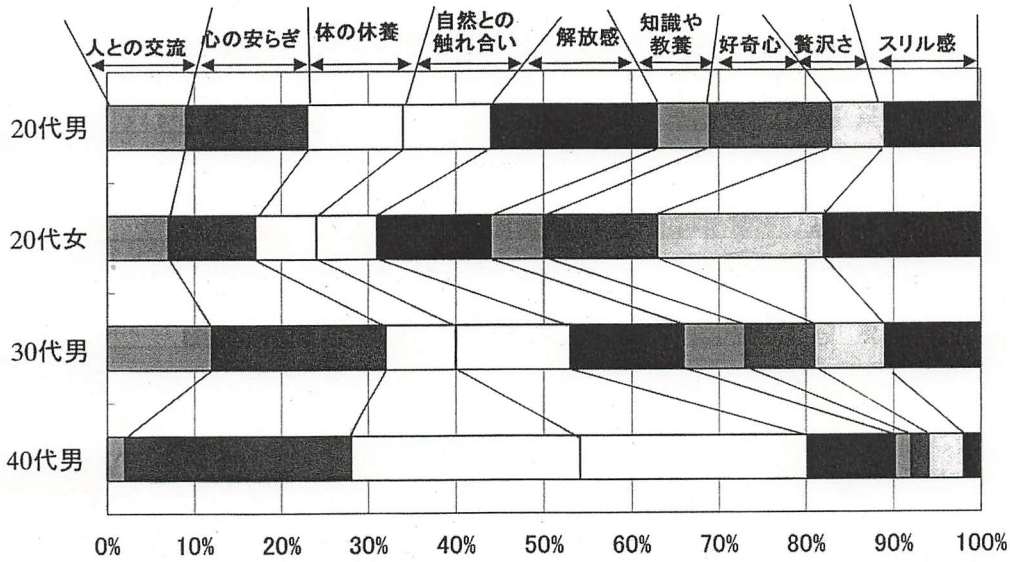


図１　旅行選択時の嗜好調査結果

次に、旅行として、温泉旅行、クルーズ、テーマパーク、海外旅行の4つの代表的なものについて、先の9つの因子をそれぞれどの程度満足しているかを、同じくAHP法で評価してみた。その結果が図2である。心の安らぎや体の休息には温泉旅行が、知識や教養、好奇心を満足させるには海外旅行が、スリル感を満喫するならテーマパークが評価されていることが判る。この図1と図2に示す結果を掛け合わせると、それぞれの年代の人がどの旅行を選択する可能性があるかが分析できる。図3がその結果である。この図からクルーズはどの年代においても約30%の人々に選ばれていることがわかり、これが日本における旅行需要の中に占めるクルーズの潜在需要とみなすことができる。

現在、日本の旅行総需要は約3億人と言われる。これには1泊程度の短いもの、キャンプなどの安上がりなものなど全てを含んでいる。JTBでは、日本の旅行需要の詳しい分析が行われており、期間や費用の分布などが公表されている。これらの分布を使って、総需要の3億人のうちクルーズに参加できる層を抽出し、さらに現在のクルーズの障害となっている要素として、「船酔い」、「クルーズの認知度」を考慮した。これらの障害要素は、理論的に決定することが難しかったので、適当な関数を仮

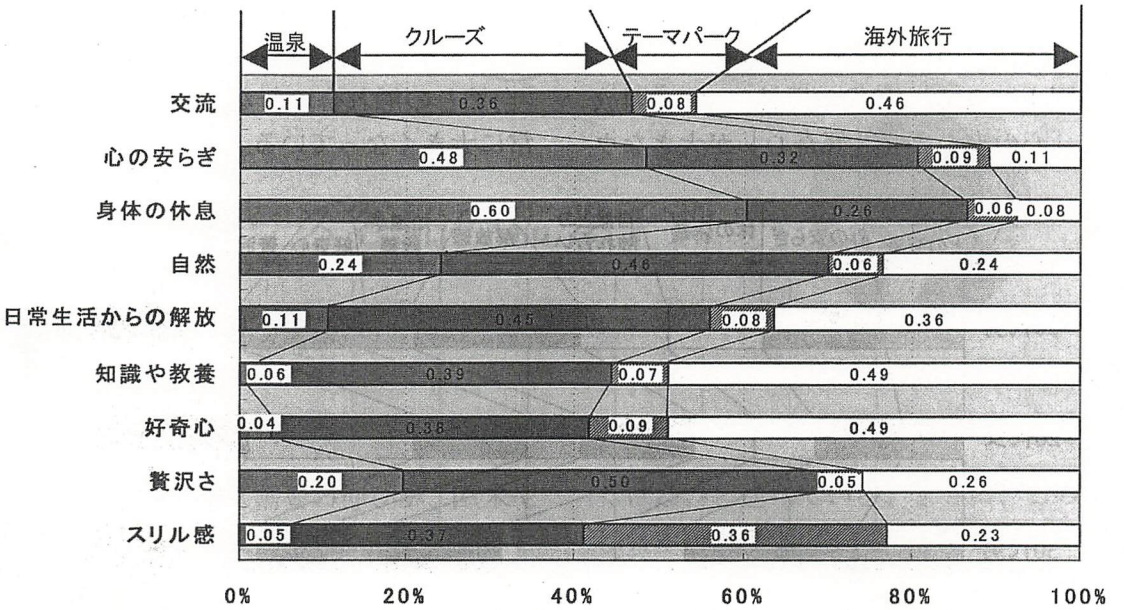


図2 4つの代表的旅行の特性評価

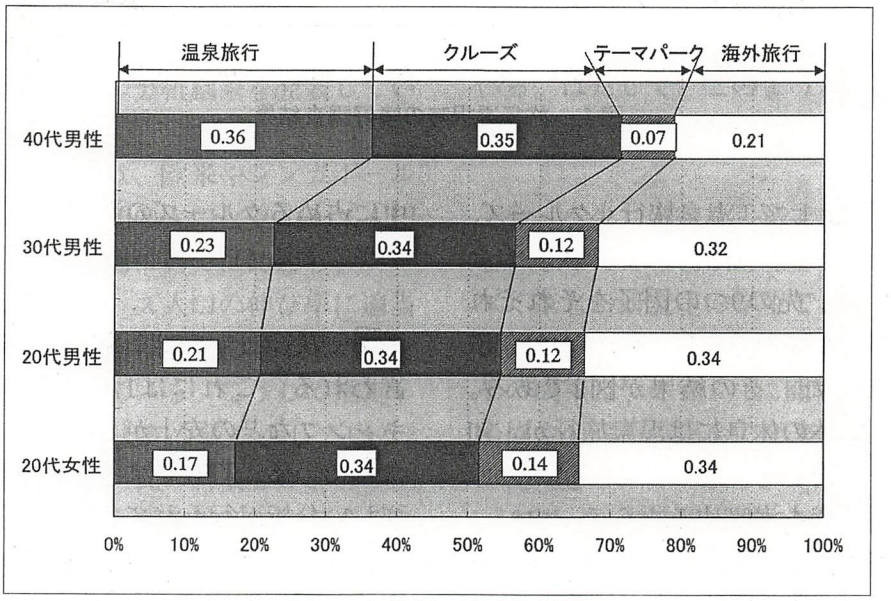


図３　各旅行の潜在的需要

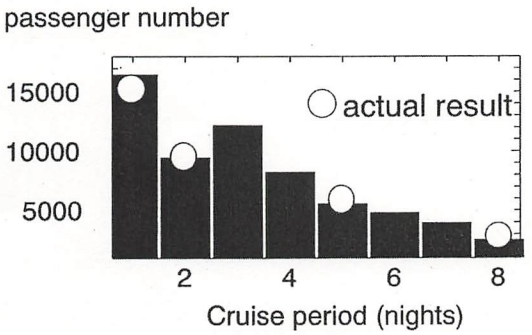
定し、その係数を、最終結果が現在の日本におけるクルーズの実績と合うように決定した。こうして日本のクルーズの需要予測法が完成した。

図4がその予測法によって得られた日本のクルーズ需要の結果と、実績を比較したものである。予測にあたってはクルーズ料金を、日本のクルーズ客船の平均的な値と

して、1泊あたり42000円としている。両者は比較的よく一致しており、予測法の精度はよいことが確認できる。

次に、クルーズ料金を下げると需要がどのように増加するかを予測してみた。結果を図5に示す。料金を下げるに従って、当然のことながら需要は増加し、カリブ並の1泊1.5万円程度にすると需要は6倍余りに増加することとなる。

しかし、1泊1.5万円という安いクルーズが実際にできるのであろうか。クルーズ客船を日本籍と仮定してコスト計算をしてみた結果、かなりの大型化をしてもこの価格でのクルーズは日本籍では難しいことが分かった。表1には、船の大きさをいろいろ変えた場合の採算性を計算した結果を示す。この結果から、カリブ海と同様に、できるだけ大型化した船を使う方が採算性はよいことが分かる。



Predicted result for 42,000 yen

図4　クルーズ需要の推定値と実績値との比較

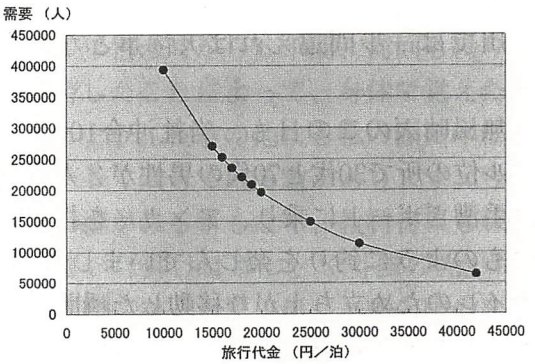


図5　クルーズ料金と需要の関係

旅行代金(円／泊)	需要(人／日)	隻数	旅客定員	総トン数(GT)	運航費	収入(億円)	比(収入／運航費)
16000	2728	1	2728	91249	143.362	143.384	1.00
20000	1998	1	1998	65635	107.085	131.269	1.23
20000	1998	2	999	30583	114.885	131.269	1.14
25000	1384	1	1384	44091	76.574	113.661	1.48
25000	1384	2	692	19811	84.375	113.661	1.35
30000	1017	1	1017	31214	58.337	100.225	1.72
30000	1017	2	509	13372	66.138	100.225	1.52

表1　採算計算の結果